

新たな段階の架空資本の解明に向けた理論的準備（その1）

崎 山 政 毅
井 上 康

はじめに

われわれはすでに、現在の資本主義が架空資本の運動に支配されているだけでなく、その運動が新たな段階に達したことを述べた¹⁾。そのことは、サブプライム・ローン危機からリーマン・ショックにいたる過程で、先物取引における世界最大の取引所であるシカゴ・マーカンタイル取引所（CME）グループが²⁾、金融デリヴァティブに特化した世界有数の取引所であるシカゴ商品取引所（CBOT）を吸収・合併した³⁾、一連の事態からも明らかである。リーマン・ショック後の金融取引は、コンピュータによる膨大なデータの算術的处理をもとにした“machine trading”が支配的になった。

machine trading は、次の課題を目的とするコンピュータ・アルゴリズム・プログラムを基礎とする⁴⁾。金融取引に際して、ある特定の投資家が種々の金融商品を組み合わせて収益極大化を目指して他の投資家を出し抜く、という課題である。ところが「ある特定（ヨ）」は、ただちに「すべての（ヰ）」に転化せざるを得ない、というアポリアに陥る。かくしてプログラムにこのリスクを回避する選択、および「最適近似解」が要請される。これは一種の多体問題である。だが当然にも解答可能な多体問題は限定されている。しかも、プログラムは膨大な他の投資家たちの行動を変数とするため、コンピュータ処理において還元不可能な事態に、しばしば逢着せざるを得ない⁵⁾。さらに、人間の自然的身体能力では対応不可能な、ナノ秒単位での取引（High Frequency Trading 高速度取引）を同時並列的におこなうことが、金融取引における支配的なありようになったため、その必然的な派生物として、一切の倫理性を欠き他人を陥れて出し抜くことを本旨とする「捕食獣的活動 predatory action」と呼ばれるようになった投資が現れ、主流へと転化した⁶⁾。さらに、投資家がある種の「エージェント」としてとらえ、投資活動をそれらの額や活動回数といった「数」の問題ではなく、「語り narrative (s)」あるいは「物語 story (stories)」と措く観点も——「エージェント」には語りや物語の倫理性があくまで欠如しているのだが——しばしば見受けられるようになっている⁷⁾。

こうした種々の傾向は、架空資本の運動がその新たな段階において、もはや何ものをも憚らずに本質を剥き出しにした状況下での商品語の前景化を、一定反映したものと言える。とはいえ、言語を主題とするような思考枠組みについては、きわめて論理的な批判が存在する。たとえば、モルガン・スタンレーやソロモン・ブラザーズのリスク・マネジメントの統括をつとめ、ムーア・キャピタルやブリッジウォーターといった大規模ヘッジ・ファンドでもリスク・マネジメントを統括した後、（逃げるようにして）財務省顧問とカリフォルニア大学の経済学教授へと転身したリチャード・ブックスティバーは、現在の金融市場は演繹論的な投資活動がほとんど不可能な世界になっているが、演繹論的投資活動が可能な状態こそが望ましいとして、帰納論でさえない「語り」、「物語」といったモデルを退ける⁸⁾。

ブックスティバーの「結論」になりえぬ「結論」は、現実資本の運動が支配的であった時代への

郷愁がまとう外被にすぎない。だが、「語り」や「物語」といった観点を金融市場に持ち込み、現在の資本主義の問題の根幹を捉えようとする試みは、無力であり不毛である。なぜなら、そうした試みをなしている論者たちは、おしなべて、ある種の人間中心主義的「人間＝主体」観を立脚点とし、「人間的なプログラム上のエージェント」を指定しているからである。このような思考は決定的かつ根源的に誤っている。資本主義的生産様式が支配的な社会における主体は商品であって、人間は「経済的諸範疇の人格化」⁹⁾（『資本論』初版序文）として現われるからである。「物語」や「語り」で金融市場の様態をとらえようとする論者たちの思考からは、金融デリヴァティブに代表される、架空資本の運動の支配下における架空的な商品が、現在の主体であることが、完全に抜け落ちているからである。

そうした誤謬は、頹落した「知」を金融デリヴァティブのごとくに大量産出する。それゆえ、われわれの焦眉の課題は、現下の架空資本の運動を理論的に解明することとならざるを得ない。

だが、われわれ自身の理論展開を開示する前に、現在の資本主義に関する主要な妄誕・虚説を徹底的に批判し、理路の先行きを丁寧に掃き浄めておく必要がある。批判対象は下記の4つである¹⁰⁾。

- ① 「認知資本主義」論
- ② レギュラシオン学派の金融分析
- ③ ドイツのKrisisグループやフランスの新・反資本主義党の金融論
- ④ ビットコインに代表される「仮想通貨」、「情報通貨」、あるいは「暗号通貨」を資本主義へのオルタナティブとする論

上記の内、①から③は、〈利子生み資本－架空資本〉に関する研究展開がもたらした成果を無視しているという点で、共通している。その上で、①と②は、金融市場の制御可能性あるいは操作可能性（controllability or manageability of financial market）という信条^{クレド}を共有している。また、③は、（元）トロツキストを軸とする種々様々なグループによる議論を含むが、きわめて政治主義的で、ほぼ同一内容に収斂するので、一括して論じることとする。

最後に「仮想通貨」「情報通貨」「暗号通貨」などの④の議論は、一方で地域通貨とイスラーム金融との交叉する領域の問題であり¹¹⁾、他方で現下の金融市場の周辺部に生存のためのニッチを見出している、ある種の資本主義延命論である。だが、社会的かつ経済運動としての「仮想通貨」は無視しえない増殖を遂げていること、理論的な問題が「ブロックチェーン Blockchain」などの技術問題に偏向し、理論上の諸問題を軽視していること等を考慮に入れると、詳細に検討・批判すべき対象である¹²⁾。

まずは、「認知資本主義」論の批判から取りかかることとしたい。

1. 「認知資本主義」論批判

今日、資本主義は「認知資本主義」という新しい段階にいたった、と主張している論者がいる。だが、これは、まったく誤っている。そればかりではなく、その誤りの特質から、今日の資本主義を美化し免罪する議論と言わねばならない。

本格的な批判に移る前に、まず、この論者たちの軌跡を跡づけてみよう。

「始まり」は、クリスティアン・マラッツィによる1994年の著書であった¹³⁾。彼の著作の『靴下

置き場』という奇妙なタイトルは、次のような考えから案出されたものである。

男性は靴下がつねに決まった場所にあるとみなすが、女性はそうではない。女性は靴下を、彼女が正しいと思う場所に移すのである。〔…〕服は、女性の魅力の核心をなす「用具」である。なるほど、洗濯機という技術（不変資本）は、男性が〔洗濯という〕その家事労働を行なうことをわざわざ補助してはくれつつあるが、男性は洗濯物とそれほど密接に触れあいはしないし、過剰な配慮を行なうことを拒み続けもする。〔…〕／〔…〕／アダム・スミス以来、経済学という学問は、〔資本家によって規定された労働時間を労働者がいいかげんにすごすという〕放縦の原因となる矛盾を払拭するべく、全力を傾けてきた。経済学が行なおうとしてきたことは、量的側面、「靴下の置き場」、剰余——その背後には労働する側と〔労働への拘束を〕義務づける側との間の主体の差異の歴史がひそんでいる——を排除することなのである。つまり経済学は、形式的同一性を介して単純化することをつうじて、権力関係という政治的「領域」にかかわる内的に異なる弁証法的範疇にそなわった矛盾を、論理的に解消しようとしてきたのだ。¹⁴⁾

靴下の事例は家事労働における性別役割分業の問題である。挙げられている事例には男性優位主義——とくにイタリアでのそれ——のヘテロセクシュアルな権力関係が関わっている。その問題は、70年代のアウトノミア運動以降、重要な役割をはたしてきたフェミニズム運動が提示した問いへの解決を要請していよう¹⁵⁾。だがマラッツィの例示を、歴史的な文脈への考慮もなしに、古典派以来の経済学の欠陥と同一視することは困難である。彼の言う、「権力関係という政治的「領域」にかかわる内的に異なる弁証法的範疇にそなわった矛盾」という一見複雑かつ難解な「矛盾」は、労働者に対する指揮権〔Commando〕をふりかざす資本家と、剰余労働を強いられる労働者との間のものであろう。しかし、労働力を商品として売ること、賃金奴隷として一定時間拘束される強制力と、労働力商品を買うことで資本家がふりかざす指揮権との間に横たわるものは、マラッツィの述べる奇妙で難解な「矛盾」ではない。それをマラッツィは、家事労働における性別役割分業の権力関係という次元の異なる関係性と同一視し、批判してみせようとする。

到底、事例としても立論としても成功しているとは言えない。だが、マラッツィの上の引用は、彼が頭に思い描くところの「経済学」では対応できない事態が到来している、という本旨に対する、落語で言うところの「マクラ」なのだ。その事態とは、「フォーディズム経済」¹⁶⁾の終焉にともなう、資本と労働との関係の変容である。

すなわち、マラッツィは、「ポスト・フォーディズム経済」においては言語・コミュニケーション行為と生産労働が重合し、言語が直接的に生産力になっていることを示そうとする¹⁷⁾。そのために彼は、ドゥルーズ／ガタリ風の「言語機械〔macchina linguistica〕」なる無規定な用語を導入したり、「経済学の言語論的展開〔svolta linguistica dell'economia〕」などと、概念としては定立できない「ポスト構造主義」的「表現」を述べてみせる。だが、「言語が直接的に生産力になる」などということはありえない。たしかにフェルディナン・ド・ソシュール以降の構造言語学は、言語の音声的差異が人間の知覚を構造化する、としてきた。しかし言語がそのままにして物質的な生産力になるはずなど、ありえないことである¹⁸⁾。

しかし、マラッツィの根を持たない（それゆえにドゥルーズ／ガタリの「リゾーム〔rhizome〕」も構成しえない）発想は、情報通信技術の大きな展開によって見込み生産に因る時間差から発生していた在

庫循環が消滅するのではないかという「ニュー・エコノミー」論に結びつけられ、2001年の『資本と言語』において強化された¹⁹⁾。1999 - 2001年にかけてのいわゆるITバブル崩壊によって、「ニュー・エコノミー」論は誤りであることが明白となったにもかかわらず、新興経済圏の危機に対してアメリカ合衆国の好況感がつづいたこともあり、両者が混同されたまま（あるいは意識的に混同したまま）、「言語=生産力」すなわち「認知」が資本主義にとって重要だとする議論が生き延びたのである。こうした事態の結果が「認知資本主義」論に凝集したのは、ある意味で必然であった——たとえそれが誤謬であることが明々白々であろうと。「懲りない輩」とは、「認知資本主義」論者たちのための言葉である。

「認知資本主義」論の主唱者のひとり、ヤン・ムーリエ＝ブータンは、まさに自分たち一派の立場をそのままタイトルとした『認知資本主義：新たな大転換』（2007年）で、「認知資本主義」には15の指標があるとした²⁰⁾。だが、それらを取り上げている対象が、たとえビッグ・データやクラウド・ソーシングであろうと、数（たとえば歴大な取引数）の問題が存在はしても、認知の問題には帰着しない。つまり、産業資本主義の「後」、あるいは彼らが呼ぶところの「ポスト・フォードイズム経済」を、精確かつ理論的に解明している訳ではまったくないのである²¹⁾。

こうした「認知資本主義」論を一言で特徴づけるとすれば、主体性論的「構造改革」論ということになる。それは、マルクス『経済学批判要綱』を積極的に誤読した主体性論が、アントニオ・グラムシの理論を積極的に誤読した「構造改革」論に癒着することによって生み出されたものである。「認知資本主義」論は、ごく最近のものではあるが、あくまで「構造改革」論の一つにすぎない。それゆえ、「構造改革」論に必然的にもとめられる要請に従って、資本の開化的側面を実体化しなければならない。つまり、資本主義的生産様式が支配する社会にあっても、資本の開化的側面が現実に実体的に存在するものとして捉えなければならず、それを「陣地」として確保し、それを次第に拡大していく「陣地戦」を展開しなければならない²²⁾。では「認知資本主義」論における（「機動戦」を欠いた）「陣地」はどこに存在するか？ それは、「一般的知性」なる形で個々の労働者の頭脳にある、とされる。かつてトリアッティがイタリア共産党を仕切っていた時代には、「陣地」は、工場を中心に、それこそ社会のほとんどあらゆるところにあるものだとされていた。これらがなんと、「認知資本主義」の段階にあっては、個々の労働者の脳の中に縮退してしまったのだ。この閉塞状況を打破するために、言語が生産力だという「法王庁の抜け穴」的主張が展開されるわけである。

こうして、個々の労働者の労働能力の質に眼が向けられ重要視されることになる。その結果、主体性論との癒着が果たされるのである。ここでは、〈物質的労働－非物質的労働〉なる奇妙な非概念対が発明される。それは、現実に存在しないものであり、概念として定立されえないものである。

ここまでの議論だけであるなら、たんに甘ったるい夢想到に耽る「ふやけた資本主義論」というだけの話である。だが、「認知資本主義」論には、決定的な欠陥が二つ存在する。そしてその二つの欠陥から、今日の資本主義に対する美化と免罪とが生まれる。資本主義批判に背を向け、EUの経済顧問団となった「レギュレーション学派」と、「認知資本主義」論が共通の認識をもつのも当然のことといえよう²³⁾。

二つの決定的な欠陥とは以下のものである。

- ① 架空資本概念が完全に欠落している。
- ② 資本主義の独占段階である帝国主義に関する議論が完全に欠落している。

今日の資本主義を捉える際に絶対不可欠な要となる架空資本概念が完全に欠落しているので、歴

大な架空資本の運動が全世界の生産と労働の分配を規定している現実、およびその運動の結果として、〈生産 - 労働〉・〈人間 - 人間社会〉を否定していこうとする傾向性とを、「認知資本主義」論は捉えることができない。つまり、今日の資本主義が、類的存在としての人間の存在そのものに根源的に敵対している現実を把握することが、まったくできないのである。しかもそればかりでなく、「認知資本主義」論は、資本主義批判の今日的「障地」——トリアッティ風に歪曲され固定されたそれ——としての個々の労働者の〈頭脳 - 一般的知性〉なるものを押し出すことによって、今日の資本主義の開化的側面を美化し、人間存在自体への敵対性を隠蔽するにいたる。

まず「一般的知性〔general intellect〕」からはじめよう。アントニオ・ネグリののおかげで、「一般的知性」というこの概念が、何の根拠や論理の筋道も持たずに、まかりとおっている。だが、ネグリがこの概念を引いてきた元である『経済学批判要綱』では、次のように述べられている。「ノートⅦ 固定資本と社会の生産諸力の発展」における叙述である。

自然は機械を作らず、機関車・鉄道・電信・ミュール自動紡績機など作りはしない。それらは人間の産業が生み出したものであり、自然素材が、自然を支配する人間の意志の器官に、あるいは自然の中にある人間の意志の実証の器官に転化されたものである。それらは人間の手で創造された、人間の頭脳の器官であって、対象化された知力なのである。固定資本の発展は、いかなる程度まで、一般的社会的知能すなわち知識が、直接的な生産力になっているのか、それゆえにまた、いかなる程度まで社会的生活過程の諸条件それ自体が、一般的知性〔general intellect〕の制御下に入り、この知性にもとづいて改造されているかを示している。²⁴⁾

これは、マルクスが『経済学批判要綱』において、〈固定資本 - 流動資本〉なる概念対について述べたところにある。とくに、固定資本の概念に関してこの「一般的知性」というものが、「一般的社会的知識」、「一般的社会的労働」、「一般的科学的労働」、「社会的頭脳の一般的生産諸力である知識と熟練の蓄積」などとともに問題とされている。ここでの核心は、これらの用語はすべて固定資本の概念の内容を示すものだ、という点にある。つまり、資本の一様態たる固定資本が論題だということである。

「一般的知性」とは、資本主義的生産様式の下では、あくまで固定資本に現われる、類的存在としての人間の社会的な力能（=展相）総体のことである。こうであるにもかかわらず、「認知資本主義」論者たちは、資本の一様態たる固定資本に関するマルクスの議論を、機械に関する議論だと捉える。資本の生産過程ではなく、たんなる労働過程の問題だと捉えるわけである。その上で「認知資本主義」論者たちは、「一般的知性」を労働手段たる機械から切り離し、それを個々の労働者の方に、その頭脳の方に見るのである。「認知資本主義」論者たちは、〈商品 - 貨幣 - 資本〉の運動を捉えること、つまりあくまで価値の系を軸に対象を捉えることをしないで、議論を使用価値の系に移してしまう。資本の生産過程 - 資本の生産手段ではなく、労働過程 - 労働手段・労働対象を問題にし、労働過程における生きた労働、つまり具体的有用労働を問題にする。このような理屈には、資本主義への批判が決定的に欠落している。

しかも、資本主義的生産様式の発展段階を、①資本の下への労働の形式的包摂段階、②資本の下への労働の実質的包摂段階（産業資本主義段階 - フォーディズム段階）、③「認知資本主義」段階、とし、それを労働者の側から捉えるのである。かくして「一般的知性」なるものが、個々の労働者の

側に現実在る、と措かれることになる。主体性論的「構造改革」派としての核心が、ここに存している。

ネグリはそうした「論」を「生きた労働」の問題にすりかえ、高い評価を与える。だが、「一般的知性」の下での制御の核心は固定資本すなわち機械制にあるのであり、上記の引用を含む叙述には、次のような前提がつけられている。

労働の生産力の増大と必要労働の最大限の否定とが、資本の必然的傾向であることは、すでに見たとおりである。この傾向の実現が労働手段の機械装置への転化なのである。機械装置では、対象化された労働が、素材的に、支配する力〔die beherrschende Macht〕として、また同時に、自己の下への生きた労働の能動的な包摂〔active Subsumption〕——生きた労働の取得によるばかりでなく、実質的な生産諸過程それ自体における包摂——として、生きた労働に対抗するのである。²⁵⁾

ただし、このノートの最終部に補遺として、次のことが述べられている。

格別の明敏さがなくても理解できるだろうことは、機械は、たとえば農奴制の解体によって生じた、自由な労働つまり賃労働を出発点として、生きた労働に対立して、生きた労働に対して疎遠な所有であるとともに敵対的な力として〔als ihr fremdes Eigentum und feindliche Macht〕、対立的にのみ発生しようということ、すなわち、機械は生きた労働に対して、資本として〔als Capital〕対立せざるを得ないということである。だが同様に見抜くことができるのは、機械は、それがたとえば連合した労働者の所有になっても〔sobald sie z.B. Eigentum der associirten Arbeiter〕、社会的生産のさまざまな行為当事者〔Agenten〕であることをやめないだろう、ということである。第一の場合には、しかし、機械の分配、つまりそれが労働者に属していない〔nicht gehören〕ということが、同様に、賃労働にもとづく生産様式の条件である。第二の場合が生ずるとすれば、そこでの変化した分配は、歴史過程によってはじめて成立する、変化した生産の新たな基盤から生じることとなるだろう。²⁶⁾

ここでは、機械という生産手段が、資本主義社会と低い度合いの共産主義社会において占める位置と意義とが対比されている。とはいえ、後者の社会については、「それがたとえば…なくても」、「…とすれば、…歴史界によってはじめて成立する…なるだろう」という条件がつけられている。この点に注意を払わなければならない。「一般的知性」は、資本主義を根底から廃絶する変革によって、ようやくその全面開花を遂げる準備を整える。いかに機械制が——コンピュータやインターネットの場合のように——展開しても、資本主義的生産様式の支配と拘束の下にあるかぎり、それは労働者に対して敵対的かつ疎遠な所有下で、あくまで資本の生産力として現われ、「生きた労働」に敵対するのである。

さて、再度「認知資本主義」論批判に筋を戻さなければならない。「認知資本主義」論は、架空資本の運動が、〈いま・ここ〉の徹底した収奪と廃棄とをつうじて〈未来〉を幾重にも食べ物にしている現実を捉えない。その代替物として、「レント」論なる、まったく非現実的で没概念的な物言いを持ち出し、この悲惨極まりない現実を隠蔽するのである²⁷⁾。

「レント」論の代表例として、カルロ・ヴェルチェッローネの述べるところを見てみよう。ヴェルチェッローネは、その論考「価値法則の危機と利潤のレント化：認知資本主義のシステム危機についての覚え書き“Crisi della legge del valore e divenire rendita del profitto. Appunti sulla crisi sistemica del capitalism cognitivo”」で、「価値法則の危機という言葉で理解すべきことはいかなるものだろうか？〔*Che dobbiamo comprendere gli termini di crisi della legge del valore ?*〕」と自問し自答する²⁸⁾。それは①資本主義が生産を合理化する基準としての価値法則が枯渇したこと、②商品のもつ論理を主要な基準として用いながらも、使用価値生産と使用価値への欲求との実現を累進的に発展させる社会的関係とみなされていた価値法則が枯渇したこと——これが「価値法則の危機」というのである²⁹⁾。このマルクスの用語が充満した非マルクスの「危機」に「曖昧さを残さないため」³⁰⁾、ヴェルチェッローネは急いで論を付け足す。

このことは、労働が今や価値および剰余価値を生み出す本質つまり源泉ではなくなったことを意味するものではない。そこでの意味とは、価値・剰余価値法則と搾取法則〔*le leggi del valore e valore-surplus e la legge di sfruttamento*〕が、マルクスによれば——その正否は措くとして——資本にそなわっていると考えられる進歩的機能を失った抜け殻として生き延びるということである。ここで言う進歩的機能とは、労働を組織化し、生産諸力を発展させる際に、稀少性と闘い、「必然の国から自由の国へ〔*dell regno della necessità al regno della libertà*〕」の移行を成し遂げるための手段として、資本が果たす積極的かつ創造的な役割のことである。／このことは同時に、資本-労働関係の敵対性が、知識にもとづく諸基盤上で経済を支える共の諸制度、および、レントの形態の下で自らを展開する認知資本主義における収奪の論理として、徐々に現われ出てきていることを意味している。この際のレントは金融の諸表現のひとつだが、架空諸商品を架空資本に転化することをつうじて、それらの表現を総合するとはいえ、あくまで一表現にすぎない。³¹⁾

「剰余価値法則」という語は、『資本論』初版から現行版全三部までをつうじて、ただ一箇所「剰余価値率」の脚注に述べられているだけである³²⁾。「搾取法則」なる概念は、『資本論』においてはどの版でも、一度たりとも述べられていない。また、レント *Rente* は現行版にあっては地代にのみ用いられ、1863-1867年草稿でも、それは変わらない。はっきりとそれが表現されているのは、現行版第三部第七篇第48章「三位一体的定式」の冒頭だが、ここではマルクス自身の草稿にしたがって、「レント問題」を見ておこう。

資本-利潤（企業利得+利子）、土地-地代、労働-労賃、これは三位一体的形態であり、社会的生産過程のあらゆる秘密を包括しているものである。

Capital – Profit (Unternehmungsgewinn + Zins), *Grund und Boden- Rente*, *Arbeit- Arbeitslohn*, dieß ist die trinitarische Form, die alle Geheimnisse des gesellschaftlichen Produktionsprocesses einbegreift.³³⁾

レント（ドイツ語では *Rente*）は、ヴェルチェッローネが勝手に妄想をたくましくしているものとは、まったく異なるのである。さらにヴェルチェッローネが引用する「必然の国から自由の国へ〔*dell regno della necessità al regno della libertà*〕」というイタリア語表現は³⁴⁾、マルクスの原文と本旨

に沿うならば「必然の国から自由の世界へ」である。これも同じく「三位一体的定式」中の表現であるが、その草稿でマルクスが述べているところを引用しておこう。

社会の現実的富〔*Der wirkliche Reichthum der Gesellschaft*〕も、その再生産過程を不断に拡大していく可能性も、したがって、剰余労働の〔時間的〕長さにはではなく、社会の生産性にかかっており、また社会の再生産過程が遂行されるため、より豊かであるか、より貧弱であるか、という生産諸条件にかかっている。実のところ、自由の世界〔*Das Reich der Freiheit*〕は、窮迫と外的目的性によって定められた諸労働がなくなるときに、はじめて始まる。つまりそれ〔自由の世界〕は、事の本性上、本来の物質的生産の領域の彼方にある。未開人は自分の欲望を充足させるために、また自分の生活を維持し再生産するために、自然と格闘しなければならないが、それと同じように文明人もまたそうしなければならない。人はどんな社会形態においても、また考え得るかぎりのどんな生産様式の下でも、そうしなければならない。人の発達につれて、自然必然性の国〔*das Reich der Naturnotwendigkeit*〕は高まる。人の欲望が高まるからである。しかし同時に、この諸要求を満たす生産諸力〔*productiven Powers*〕も同時に高まる。この領域における自由はただ以下のところにのみ、あり得る。すなわち、社会化された人間〔*der vergesellschaftete Mensch*〕、つまり結合された生産者たち〔*das associirren Producenten*〕が、自然との間の物質代謝を合理的に調整し共同的な統制の下に置くというところに、つまり、盲目的な力たる自然との物質代謝によって〔*von ihm als einer blinden Macht*〕ではなく、最小の消費によって、人間の本性にふさわしく、また、それにもっとも適合した条件の下で遂行するというところに、である。だがそれは未だなお、必然性の国〔*ein Reich der Notwendigkeit*〕に留まっている。この国の彼岸で、自己目的とみなされる人間の能力の発展が、自由の、ほんとうの世界〔*das wahre Reich der Freiheit*〕が始まるのである。しかしそれはただ、かの必然性の国を基礎として、その上のみみ開花しうるのである。³⁵⁾

人間社会と自然との物質代謝という以上、「稀少性」なるブルジョア俗流経済学の用語は不要であるし、「必然性の国から自由の世界への」移行は、マルクスの叙述からも明らかなように「格闘しなければならない」のである。ヴェルチェッローネの「楽観論」は、『資本論』およびその準備労作には、ちらとも姿を見せない。

その他、「架空諸商品」なるカール・ポランニーの『大転換 *The Great Transformation*』（1944年）に無規定に述べられているものを引いてくる、『剰余価値学説史』の叙述から実際にはブルジョア急進派批判として述べられたものを己の論に都合よく切り取って挟み込むなど³⁶⁾、枚挙に暇がないほどの「継ぎ接ぎ」によって、彼の「論文」は「出来上がって」いる。

しかもそうした空理に、〈共〉の潜在的可能性を読み取ろうとする資本主義美化論が重ねられる。さて、「レント」について、もう少し詳しく述べておこう。

「認知資本主義」論者たちは、「利潤のレント化」なる事態について語る。これは、〈利子生み資本－架空資本〉概念が完全に欠落していることによってもたらされたものである³⁷⁾。

利子生み資本の概念は、「G・G'」という無概念的定式によって表わされる。架空資本ではこれがさらに「発展」し、何もない〈無〉から突如G'が現われる。motus ex nihilo! この運動こそが、今日、全世界を覆っており、現実の生産と労働の分配を規定しているのである。「認知資本主義」論者

たちは、この現実^レに右往左往し途方にくれて、「レント」にしがみつ^レく。それも精確な理論的概念ではなく、漠然たる用語以外の何ものでもない「レント」である。当然の結果として、彼らの「レント論」は、架空資本が全世界を席卷しているこの現実^レをまったく捉えることができない。そればかりでなく、その現実を隠蔽し、また類的存在としての人間に対する根源的な敵対性を免罪する。

ここで強調しておかなければならないのは、帝国主義論の完全な欠落の問題である。レーニンによってみごとに定式化された帝国主義論を、「認知資本主義」論は徹底して無視・否定する。論者たちの物言いに「帝国主義」なる用語が垣間見えたとしても、それはたんなる修辞にすぎず、帝国主義批判ではまったくくない。そのことによって、今日なお、厳然として存在する帝国主義の支配・収奪・抑圧とその残虐性を捉えることなく無視するのである。その一方で「一般的知性」なものを喋々と展開する。かくして、帝国主義による支配を隠蔽することとなるのである。この点で「認知資本主義」論は、度し難い自己中心主義であり、欧米日の帝国主義の自己免責の物言いにすぎない。ヨーロッパの論者たちは、自国帝国主義をまったく対象化しない（あるいは対象化しえない）。そのような思考の結果、たとえば、いわゆる「イスラーム過激主義」による運動を、理論的に精確に対象化し根源的に批判することなく、単純に「国際的テロリズム」だとする帝国主義による軍事的抑圧運動にやすやすと呑み込まれ、尖兵の役割を担うこととなる。

「認知資本主義」論に対する批判の核心は、以上に述べたところにつ^レきる。だが、ここまで述べてきたもの以外に、「認知資本主義」論に固有な以下の用語については述べておかなければならない。その誤^レった、もしくは非概念的な用法^レを指摘するためである。

まず〈資本の下への労働の形式的包摂－資本の下への労働の実質的包摂〉についてである。

この概念対は、マルクスが、『資本論』第一巻末尾におくことを予定して1863 - 1864年に執筆したとされる、草稿「直接的生産過程の諸結果」のなかで定立したものである。また、その草稿では、後者の概念である「資本の下への労働の実質的包摂」は、「独自に資本主義的な生産様式」としばしば言い換えられている。ともあれ、資本主義的な生産様式がどのようにして一社会を支配することになるか、言い換えれば、資本の運動の下に賃労働がいかに組み込まれ支配され隷属させられるのか、これを総括的に解く鍵となる概念対として、定立されたのである。

ただしこの概念対は、『資本論』初版では、前面に押し出されてはいない。というのは、初版では(第二版以降も含めて)、蓄積論がきわめて充実し深く掘り下げられたものとして執筆されたことによって、その概念の内容がより具体的に、深化拡張されて展開されたからである。草稿「直接的生産過程の諸結果」全体が用いられなかったのも、こうした理由によるのであろう。とはいえ、草稿全体、またそこで重要な意義をもつ、かの概念対は、『資本論』読解にとってきわめて意義のあるものである点にかわりはない。

以上の説明から言うまでもないことだが、この概念対は1857 - 1858年草稿(『経済学批判要綱』)で定立されたものではない。文献学上の事実と理論的な事実とがそのことを明らかにしているにもかかわらず、「認知資本主義」論者たちは、「一般的知性」とこの概念対とを結びつけることによって、あたかもこれが、『経済学批判要綱』で定立されたかのように扱っている³⁸⁾。ここに「認知資本主義」論者たちの詐術がある。

次に、〈非物質的労働－物質的労働〉なるものについてである。

上記の「議論」を補填するものが、この非概念対である。彼らの議論によれば、「一般的知性」を担うことが現実的課題となった個々の労働者の労働は、主に「非物質的労働」だとされる。だが、

〈非物質的労働－物質的労働〉というこの対は、概念として決して定立されえない。なぜなら「非物質的労働」なるものは、現実に存在しないからである。

マルクスは、明確に概念として定立された二つの概念対を示した。一つは、〈非物質的労働生産物としての商品－物質的労働生産物としての商品〉、二つ目は、〈精神労働－肉体労働〉、である。「認知資本主義」論者たちは、この二つの概念対を一旦解体した上で、キメラ的に「再構成」し、個々の労働者の側の議論として、かの非概念対を生み出したのだ。

総じて「認知資本主義」論者たちは、労働を問題とすることによって、「生きた労働」を重視する。精確に言えば、「生きた労働」以外を恣意的に捨象し、「生きた労働」に特権的な位置を与える。しかし、資本の運動を捉えるためには、「生きた労働」ではなく、「対象化された労働」をこそ問題としなければならない。

〈物質的－非物質的〉なる対は、労働の結実、すなわち労働生産物である商品において、はじめて明確に概念として規定されうる。その対は、「生きた労働」においては、決して概念規定できないものである。しかも、非物質的労働生産物である商品においては、その商品の生産過程において労働対象が存在せず、①商品の生産過程、②商品の譲渡過程、さらに③商品の消費過程が、場所的・時間的同一である³⁹⁾。こうして、「生きた労働」と「対象化された労働」との「混同」——というよりも後者の消去——がきわめて容易に行なわれることになる。

ところで、これらの論者たちが、「非物質的労働」として非現実的に夢想する、現実のAIなどにかかわる諸労働現場は、きわめて悲惨なものであって、「一般的知性」云々など個々的にはどこにも見つけ出すことなどできないものである。また、もし金融にかかわる諸労働について、問題にするとすれば、それらの労働は、〈未来〉を食物にするための奴隷労働でしかないものであって、ここでもまた、「一般的知性」などを云々することの非現実性は明らかである。

続いて、ミシェル・フーコーの「生政治」を語源とした没概念的用語「生経済」にうつろう。フーコーはコレージュ・ド・フランスの1978-1979年度講義「生政治の誕生」において、数回マルクスに触れている。まずフーコーの述べるところを明示しておこう。

わたしは、マルクスが商品からその秘密を引き出そうと試みたのと同様の仕方で、国家からその秘密を引き出そうと試みるつもりはありません。[...] マルクスには——これはマルクスをよく知る人々が語っていることですが——権力の分析がない、国家論が不十分である、今やそうした理論を作るべき時なのだ、と。しかし、国家論を自らに与えることが、そこまで重要なのでしょうか？（1979年1月31日講義）⁴⁰⁾

マルクスはもちろん資本主義のメカニズムあるいは論理そのものを「労働者の賃労働の中に」見るわけですが、その論理とは一体どのようなものなのでしょう？ それは[...] そのような労働が「抽象的」であるということ、つまりそのような労働は、具体的労働が労働力に変形され、時間によって測られ、市場に置かれて賃金として支払いを受けたものだ、ということです。それは具体的な労働ではありません。それとは対照的に、人間的現実の総体から切り離され、その質的可変項のすべてから切断された労働です。[...] 資本主義は労働を商品とし、生産された価値の諸効果しか航路に入れない、ということです。／ところで[...] マルクスにとって、そうした「捨象（抽象化）」の原因は何でしょうか。それは、資本主義です。資本の論理、その歴史的現実が、労働を

「捨象」する原因とされているのです。(1979年3月14日講義)⁴¹⁾

フーコーはきわめて誠実かつ真摯にマルクスに向き合っている。「生政治」については、彼の概念であるゆえに、なおさらである。だが、フーコーの細心さと精確さをどこかに取り去ってしまえば、問題はじつに容易く恣意的可変にさらされることとなる。たとえば「生権力〔biopower ; biopouvoir ; biopotere〕」である⁴²⁾。「生経済〔bioeconomy ; bioeconomia ; bioeconomie〕」にいたっては、内容規定さえ見られない。「認知資本主義」論者たちは、おのれが愛してやまない「生きた労働」を「生経済」の基礎とでも考えているのだろうか。ところで、2010年3月26日に同志社大学でA・フマガリが「ベーシック・インカム・日本ネットワーク」の創設を記念して行なった報告によれば、「生経済」は「認知資本主義」と一体化することで「生資本主義〔Biocapitalism〕」となる、という。そして、以下のような、「創造的」議論が繰り返される。

機械がいずれ、人間の知力や身体や人間の「内なる何か」になるかもしれない。使用価値を創出し、そのことによって潜在的に「創造的」である具体的有用労働と、資本主義的生産の諸条件によって規定される抽象的人間労働との関係性は、一方で自由の潜在的可能性と労働のアウトノミアを、同時に他方で企業のための知力の抑圧とロボトミー化をもたらすのである。⁴³⁾

[①生活時間と労働時間の分離の克服、②職住分離の克服、③生産と再生産の分離の克服、④生産・流通・消費の分離の克服、というフォーディズム的分離との] こうした差異から、生労働 *biolabor* からいかにして価値が生産されるのかという議論が始まる。そのためには、分析を少なくとも三段階に区別する必要がある。知識の普及と生成に基礎づけられた労働、すなわち言語的認知労働によって形成される価値（知識価値論 *the theory of knowledge-value*）。感情労働 *affective labor* と感情の再生産労働によって形成される価値（感情価値論 *the theory of affective-value*）。最後に、ブランド化や象徴的労働による表象やイメージの生産によって形成される価値（イメージ価値論 *the theory of image-value*）。⁴⁴⁾

新奇な諸「価値論」のショーウィンドウである。だがどの「価値」も、現象的に異なって見えるにすぎない。批判されるべき対象は、変わることなく資本主義による支配なのであり、フマガリの諸「価値論」は無価値である。それよりも、すでに述べてきたように、フマガリがこうした「生資本主義」を提起しうる基盤こそが問われるべきだろう。彼がさまざまに述べた「価値」が世に充滿してみえるのは、架空資本の惑星大の運動のまぎれもない結果であるからにほかならない。

最後に、〈共^{コモン}〉なるものについて、批判を行なっておく。

「認知資本主義」論者たちは、「一般的知性」の誤読に結び付けて〈共^{コモン}〉なるものについて語る。それは、やはり『経済学批判要綱』の誤読、それも自ら進んで底なしの淵に飛び込んでいくような「読み」にもとづいている。マルクスは、労働の社会的生産力の発展、とりわけ結合労働の生産力の発展によって、価値の大きさによって測られる資本主義的富と現実の富との差が歴大なものとなることを示した。労働の社会的生産力、そこにおいてますます意義を増大させる結合労働の生産力は、あくまで〈使用価値〉の系に属するので、けっして価値とその大きさには反映しない。価値の大きさはあくまで個々の労働者の社会的必要労働時間の単純な算術和で測られる。しかし結合労働の生産

力が生み出す結実は、算術和ではなく、そうした価値の大きさととはまったく独立して増大する。こうして、資本主義的富の大きさと、現実的な富の大きさととの乖離がますます大きくなる。マルクスはそこに、資本主義的生産様式を止揚する条件を捉えた。しかし、資本主義的生産様式が支配する社会にあっては、社会的富を生み出す力は、個々の労働者の力として現われることは決してない。

この冷厳な現実を「認知資本主義」論者たちは捉えない。むしろかの富の乖離に、〈共^{コモン}〉なるものを「発見」するのだ。主体性論的「構造改革」論者たるゆえんである。だからこそ「認知資本主義」論者たちは、EUにおける架空資本の「ガバナンス」や「レギュレーション」などという「制御可能性〔controllability〕」あるいは「管理可能性〔manageability〕」の夢に耽り、「ベーシック・インカム」をはじめとした貨幣の道具的操作に過大な思い入れをするはめに陥るのである。

「認知資本主義」論者たちは、主体性論的「構造改革」派として、「一般的知性」や「非物質的労働」や〈共^{コモン}〉といった、彼らの主観では「資本主義を超えることども」を、個々の労働者の在り様に「発見」したつもりになっている。だがそれは「ベーシック・インカム」運動を生み出す程度の、あえかな白日夢でしかない⁴⁵⁾。さらに、「ベーシック・インカム」を使いこなし日々を生き抜くための「生活技法 *ars vivendi*」の徹底した社会的＝共同的な取得が、窮乏にあえいでいる者たち——資本の暴力によって周辺化されたあげく、個々に分断され、孤立した各々の生を生きる人々であり、生の類的共同性から疎外された無数の個〔individual-s〕からなる雲塊のごとき「群れ」——にこそ必要なのだと、想像さえしない。「生きるに必要と思われる平均最低限の金」を与えておけば、人間が豊かに可能性を開花させるとでも思っているのだろうか。そのような徒花への「肥料」は、害毒以外の何ものにもなりえない。

このような浅薄さに端的に表現されているように、「認知資本主義」論は、現実には、歴大な架空資本の運動が全世界を徘徊して、〈生産－労働〉・(人間－人間社会)を不要のものとして否定していく現実を背景にしなければ、成立しえない。否定の否定を「否定」して恥じない、彼ら「認知資本主義」論者たちは、そのような事態を淫靡に免罪する。そのうえで彼らが行なっているのは、現状追認の下での状況説明枠組みを提示すること以外の何ものでもない。その説明——すなわち「認知資本主義」論——は、他者を容れず他者そのものの否認に紙一重の、度し難いヨーロッパ中心主義的帝国主義容認の議論にほかならない。

その意味で、「認知資本主義」論者たちが見ようとするものは、反人間的な〈暗く暝い夢〉なのである。

(第2章以下、次号)

註

- 1) 井上康・崎山政毅『マルクスと商品語』（社会評論社、2017年）の第Ⅲ部第Ⅷ章を見よ。
- 2) Lambert, Emily, *The Futures: The Rise of the Speculator and the origins of the World's Biggest Markets*, New York, Basic Books, 2011.
- 3) Olson, Erika S., *Zero-Sum Game: The Rise of the World's Largest Derivatives Exchange*, Hoboken, NJ., John Wiley & Sons, 2011.
- 4) Chan, Ernest p., *Machine Trading: Deploying Computer Algorithms to Conquer the Markets*, Hoboken, NJ., John Wiley & Sons, 2016.
- 5) Bookstaber, Richard, *The End of Theory: Financial Crises, the Failure of Economics, and the Sweep of Human Interaction*, Princeton, NJ., Princeton University Press, 2017. ブックスティパーのこの書の副

- 題が、現在の架空資本の本質をみごとに表わしていよう。本文にかんしては、*ibid.*, ch.3 and ch.6 を参照。
- 6) Arnuk, Sal & Joseph Saluzzi, *Broken Markets: How High Frequency Trading and Predatory Practices on Wall Street Are Destroying Investor Confidence and Your Portfolio*, Upper Saddle River, NJ, FT Press, 2012. 同書は「ファイナンシャル・タイムズ」紙の出版部門が刊行したもののだが、投資家たちが自ら生み出したものによって自壊の淵に立たされていることを如実に示したドキュメントとして興味深い。
- 7) 問題を言語に見ようとする傾向は、シカゴ大学金融文化研究グループを率い、金融においては「個人 individual」ではなく「分割人 dividual」の言語がはびこり、その失敗が危機へとつながるというアルジュン・アパデュライや、中央銀行の中心メンバーの行動をもとに金融の言顔がコミュニケーション上の命令形だとする見解を示すダグラス・E・ホームズらを代表格としてよいだろう。Cf. Appadurai, Arjun, *Banking on Words: The Failure of Language in the Age of Derivative Finance*, Chicago, IL. and London, The University of Chicago Press, 2016, especially see p. 83 ff. ; Holmes, Douglas R., *Economy of Words: Communicative Imperatives in Central Banks*, , Chicago, IL. and London, The University of Chicago Press, 2014, especially see p. 136 ff.
- 8) Bookstaber, *op. cit.*, p. 182 ff. and ch. 15.
- 9) MEGA II /5, S. 14. ただし、原文では強調されている。
- 10) トマ・ピケティの『21世紀の資本』(Piketty, Thomas, *Le Capital au XXIe Siècle*, Paris, Seuil, 2013) は、基本的に(石油の生み出す利潤に多大な税をかけるといったピケティ的「現実世界」では実現不可能なものも含めて)経済政策論であるので、われわれはこれを取り上げない。ちなみにピケティは資本を資産と同一視し、金融負債を資産から除外する。そのため、「[...] 国債という資本ではマイナスが資本として現われる [...]」(MEGA II /4-2, S. 521-522.) とマルクスが述べた「資本主義的思考の狂気の沙汰」は、ピケティの正直さの前から姿を隠してしまい、彼の論には登場しない。
- 11) Maurer, Bill, *Mutual Life, Limited: Islamic Banking, Alternative Currencies, Lateral Reason*, Princeton, NJ, Princeton University Press, 2005.
- 12) ビットコイン等と地域通貨との通底性、「ベーシック・インカム」論と併行する代替通貨構想などから考えると、「仮想通貨」には一見多様性があるように思われる。だが、それらは資本主義的貨幣をモデルにし、そのモデルに、ある種のリベラル・イデオロギーを外挿した上で、情報通信技術を混淆したものと捉えることができよう。詳論は本連載の後の稿でおこなう。
- 13) Marazzi, Christian, *Il posto dei calzini. La svolta linguistica dell'economia e i suoi effetti sulla politica*, Bellinzona, Edizioni Casagrande, 1994.
- 14) *ibid.*, pp. 57-58. 強調はマラッツィ。
- 15) p. e. Dalla Costa, Giovanna F., e Mariarosa Dalla Costa, *Il salario al lavoro domestico*, Roma, Edizioni delle donne, 1978.; Dalla Costa, Giovanna Franca, *Un lavoro d'amore*, Roma, Edizioni delle donne, 1979. それぞれ伊田久美子・伊藤公雄訳『家事労働に賃金を』(インパクト出版会、1986年、絶版)、伊田久美子訳『愛の労働』(インパクト出版会、1991年)と、すぐれた訳書が刊行されている。
- 16) イタリア、フランスなどの論者の言う「ポスト・フォーディズム」には大いに疑問を抱かざるを得ない。現実資本の運動を背景にした産業資本主義下の大量生産を十把一からげに「フォーディズム」と呼んでいる傾向が明白だからである。たとえフィアット社やルノー社が存在していても、そこでの大量生産はフォーディズムとは異なる。その点については、以下の書と比較参照せよ。Hounshell, David A., *From the American System to Mass Production, 1800-1932: The Development of Manufacturing Technology in the United States*, Baltimore and London, The Johns Hopkins University Press, 1984, ch.6 (especially p. 221ff.); Piore, Michael J., and Charles F. Sabel, *The Second Industrial Divide: Possibilities for Property*, New York, Basic Books, 1984, ch. 5 and ch. 6 (especially pp. 135-142, 151-156). 「トヨタイズム」についても同様の傾向(一種のオリエンタリスト的想定)がある。次を比較参照のこと。Liker, Jeffrey, *The Toyota Way: 14 Management Principles from the World's Greatest Manufacture*, New York, McGraw-Hill Education, 2003.; 大野耐一『トヨタ生産方式の原点』日本能率協会マネジメントセンター、2014年; 熊沢誠『新編 民主主義は工場の門前で立ちすくむ』現代教養文庫、1993年。
- 17) こうした観念論は、アントニオ・ネグリを介してフェリックス・ガタリの発想から持ち込まれたと思わ

れる。そのことは、ガタリが1980年に再編集のうえ「10-18」叢書において刊行した『分子革命』中の論考「権力構成体の統合としての資本」に看取れる。そこでは、マキシミアン・リュベルとルイ・エヴラルの訳でガリマル社「ラ・プレヤド」叢書のマルクス著作集第一巻（Marx, Karl, « Introduction général a la critique de l'économie politique » traduction par Maximilien Rubel et Louis Evrard, dans *Karl Marx Œuvres. Économie 1*, Paris, Gallimard, pp. 231-266.）に入れられている、『経済学批判要綱』の質のよくない訳文を引きつつ、以下の叙述がある。「『経済学批判要綱』において、彼〔マルクス〕は、知識の総体 l'ensemble des connaissances が《ひとつの直接的生産力 une puissance productive immédiate》になる傾向を有している、と強調した。すなわち「大工業が発展するにつれて、真の富の創出は、労働の時間や量よりも、生産をもたらす直接的労働時間と共通尺度を持たないほど強力な効率をもつ労働過程で活用中の、さまざまな要因の作用に依存する。」（Guattari, Félix, « Le Capital comme intégrale des formations de pouvoir », dans idem, *La révolution moléculaire*, Paris, Union générale d'éditions, 1980, p. 71. ただし『経済学批判要綱』は、文中の引用にしたがって訳した）。MEGAの文によれば、引用部は以下のとおりである。「[...] 大工業が発展するにつれて、現実的富の創造は、労働時間と重用された労働の量とに依存することがますます少なくなり、むしろ労働時間のあいだに運動させられる諸作用因の力に依存するようになる」（MEGA II /1, S. 581.）。ちなみにネグリは、ガタリのこの書が上梓（再編刊行）された同年に、ガタリと共著で『自由の新たな空間』を表わしている。また、ジル・ドルーズを介してフォーコーを「再発見」したことも近年明らかにしている（Negri, Antonio, 'Quando e como ho letto Foucault', pubblicato sulla online magazine UniNomade, 21 novembre 2010, <http://www.uninomade.org/quand-e-como-ho-letto-foucault-2>, ritrovato al'01 gennaio 2016.）

- 18) 『ドイツ・イデオロギー』『フォイエルバッハ』章中には、次のような叙述がある。「「精神」〔“Geist”〕は本来的に物質に——この場合それは運動する空気の層、音、言語〔Sprache〕の形態で表わされる——「憑りつかれ」る〔“befahet”〕という呪いをかけられている。言語は、意識と同じほどに古い——言語は、他の人間たちのためにも存在する実践的意識であり、そのことによってはじめて私自身のためにも存在する現実的意識であって、さらに言語は、意識と同様に、まずは他の人間たちとの交通の欲求、つまり必儒なことから生じたものである」（MEW Bd. 3, S. 30. 強調は原文）。この場合の言語は振動する空気＝音波という点で「精神」に「憑りつく」物質性をもっており、それが社会的交通によってはじめて意識たりうるといのである。言語＝物質力なる短絡は、そこには存在しない。
- 19) Marazzi, Christian, *Capitale & linguaggio*, Soveria Mannelli, Rubbettino Editore, 2001.
- 20) ムーリエ＝ブータンの示す指標とは、大略、以下のものである。①「非物質的なるもの」の増大による経済のヴァーチャル化、②コンピュータ技術進展による「非物質的なるもの」の前景化、③科学技術の指導性、④とめどない技術進展による、問題への対策思案の遅れ、⑤国際分業をはじめとした労働形態の認知への従属、⑥諸市場の複雑化、⑦売買サイクルの転倒による生産過程の革命、⑧価値尺度の労働から還元不可能な多数性への転換、⑨諸過程のデジタル化による「一貫した総体〔un emsemble cohérent〕」の圧倒的強化、⑩個々の労働者の「〈頭脳間協業〉〔« coopération entre les cerveaux »〕」の勃興、⑪生きた労働への資本の依拠の増大による「〈生生産的〉〔« bioproduktif »〕」局面にもとづく、搾取と認知資本主義によって抽出された剰余価値の特殊な形態規定、⑫労働現場のシフトとクラスター化、⑬認知資本主義の非物質的本性による情報財のさらなる導入、⑭資本主義にとっての「外部」にそなわる周辺性の停止、⑮産業資本主義下での「商品による商品の生産」から、認知資本主義下での「知識による知識の生産」へのシフト。Cf. Moulier-Boutang, Yann, *Le capitalisme cognitif: La Nouvelle Grande Transformation*, Paris, Éditions Amsterdam, 2007, pp. 84-95. だが指標としては、産業資本主義的かつヨーロッパ中心主義的な「資本主義」観にあまりに束縛されたものであり、産業構造の一部で1990年代以降に生じた変化の現象叙述でしかない。さらに「認知資本主義」を画定する指標であるにもかかわらず、「認知資本主義」を「認知資本主義」で括り出そうとする（⑪、⑬、⑮）など、論理的な混乱が明らかである。付け加えれば、「非物質的なるもの」や「頭脳間協業」といった用語からは、「難解そうだが没概念的な言葉の乱舞」を見る思いを禁じ得ない。
- 21) ブルジョア経済学においても、実証分析のレベルは「認知資本主義」論者たちの想像をはるかに超えて進展している。Cf. Einav, Lilan, and Jonathan Levin, “Economics in the Age of Big Data”, in *Science*,

- vol. 346, no. 6210 (2014), pp. 1243089-1~1243089-6.; Pinkovskyi, Maxim, and Xavier Sala-i-Martin, "Light, Camera,...Income! Illuminating the National Accounts-Household Surveys Debate", in *Quarterly Journal of Economics*, vol. 131, no. 2 (2016), pp. 579-632.
- 22) グラムシにあっては、「機動戦」〔*uerra di movimenti (guerra manovrata)*〕と「陣地戦」〔*guerra di posizioni*〕の概念対の定立は、ローザ（・ルクセンブルク）、ブロンシュテイン（レオン・トロツキー）およびロシア白軍コサック兵団長ピョートル・クラスノフ（ミハイール・トハチェフスキー）などの戦争論と「対比」の上で行なわれている。もちろんこの「対比」は偽装である。《スターリンの長い手》が、自分だけでなく家族・友人・同志に届く危険性を感じたグラムシは、『獄中ノート』においても、ローザをフルネームでは書かず、トロツキーには本名のファミリー・ネームだけで言及し、スターリンの大粛清の対象となった赤軍のトハチェフスキー将軍を「クラスノフ」と呼んだのだ。そして彼が遺したものは、後に「構造改革」論と呼ばれる潮流が提示した内容と大きく異なっている。そこにはパルミーロ・トリアッティによる政治的改竄・歪曲が大きく影響している。つまり「機動戦」を欠落させた「陣地戦」という考えである。しかし「機動戦」に対置される「陣地戦」という概念は、『資本論』に反する革命（こうしたグラムシの歴史主義的『資本論』受容には、ザスーリチの手紙と同様の誤解が存在する）としてのロシア革命とは諸条件が決定的に異なる、イタリアの社会革命を構想した結果にほかならない。Gramsci, Antonio, *Quaderni carcere*, A cura di Valentino Gerratana, Torino, Einaudi, 1975, pp. 801-802; 865-866; 1228-1229; 1628-1629. グラムシ『獄中ノート』の詳細な文献学的研究については、以下を参照のこと。Franciani, Gianni, *L'officina gramsciana : Ipotesi sulla struttura dei « Quaderni del carcere »*, Napoli, Bibliopolis, 1984.
- 23) たとえばミシェル・アグリエッタとアンドレ・オルレアンの違いを取り上げてみよう。彼らは、「債権者の権力と力能〔*le pouvoir et la puissance de les créanciers*〕は〔…〕貨幣を負債に変え、負債を所有に変え、そうすることでわれわれの社会を構造化する社会的諸関係に直接働きかける能力をもとに測定される」(Aglietta, Michel et André Orléan, *La monnaie entre violence et confiance*, Paris, Odile Jacob, 2002, p. 182.) と述べる。だが、貨幣→負債→所有というような移行は存在しない。架空資本によって、労働者はその賃金を「利子」に変換され、「所有」してもいないその「利子」の元本たる「資本」を背負わされる、という「資本主義的思考の狂気の沙汰」(MEGA II /4-2, S. 522) の只中に置かれるのである。そのことを一切無視し、資本との「調整」や「ガヴァナンス」を企図する姿勢に、レギュラシオン派の反動性が如実に顕われている。
- 24) MEGA II /1, S. 582-583. 強調はマルクス。
- 25) ebenda, S. 572-573.
- 26) ebenda, S. 699. 強調はマルクス。
- 27) ブルジョア経済学の錚々たる面子が「レント」の動態解明を介した「効率的レント・シーキング」の探究に努めた挙句、みごとに失敗した結果を論集化した以下の書は、「失敗学」の模範といっても過言ではあるまい。Lockard, Alan, and Gordon Tullcock (eds.), *Efficient Rent-Seeking: A Chronicle of an Intellectual Quagmire*, Dordrecht, The Netherlands, Kluwer Academic Publishers, 2001. 編者の一人ゴードン・タロックは、「レント・シーキング」の概念を生み出し、その非効率性をあきらかにした上で「公共選択 Public Choice」論を提唱したヴァージニア学派の中心的研究者である。上記論集では、いずれの論者も自己回帰型命題——いわゆる「嘘つきのパラドクス」——で袋小路に突き当たっている。ちなみに「嘘つきのパラドクス」に対しては、ニール・ルフェーヴルとメリッサ・シェーラインの「直覚的解決 The Intuitive Solution」なるものが公表されているが、この「解決」は論理哲学の「じっくり考えることが可能」な人間的時間においてのみ意味を持つ (Lefebvre, Neil, and Melissa Schehlein, "The Liar Lied", in *Philosophy Now*, issue 51 (2005), pp. 12-15.)。G・G' という無概念的定式によって価値増殖を「瞬時」にとげる架空資本の運動にあっては、ルフェーヴルらの「直覚的解決」も無力なのである。
- 28) Vercellone, Carlo, "Crisi della legge del valore e divenire rendita del profitto. Appunti sulla crisi sistemica del capitalism cognitivo", in Andrea Fumagalli e Sandro Mezzadra (a cura), *Crisi dell'economia globale*, Roma, Ombre Corte, 2009, p. 75. なお、同書では「認知資本主義」なるものについての厳密な規定は一切ない (レギュラシオン学派と 1990 年代半ばに結び付いた、後の「認知資本主義」論

者たちの在りようは以下の書に明らかである。Aglietta, M., et al., *École de la régulation et critique de la raison économique*, Paris, L'Harmattan, 1994.)。ヤン・ムーリエ＝ブータンや、ガブリエル・コレティとベルナルド・ポールレ、アンドレア・フマガッリらこうした傾向の論者たちには、一定の曖昧な関内における「認知資本主義」なるものについての共有認識が——さほどの議論もなく——できていたように思われる。以下を参照。Fumagalli, Andrea, *Bioeconomia e capitalismo cognitivo : Verso un nuovo paradigma di accumulazione*, Roma, Carocci, 2007.; Moulier-Boutang, Yann, *Le Capitalisme cognitif*, Paris, Éditions Amsterdam, 2008.; Colletis, Gabriel et Bernard Paulré (coordonné), *Les nouveaux horizons du capitalisme : Pouvoirs, valeurs, temps*, Paris, Economica, 2008. ; Marazzi, Christian, *Finanza bruciata*, Bellinzona, Edizioni Casagrande, 2009. ; Roth, Karl Heinz, *Die Globale Krise : Band 1 des Projekts "Globale Krise – Globale Proletarisierung - Gegenperspektiven"*, Hamburg, VSA Verlag, 2009. ; Chicchi, Federico, *Soggettività smarrita. Sulla retoriche del capitalismo contemporaneo*, Milano, Mondadori Bruno, 2012. ; Lucarelli, Stefano, *L'Europa dei territori. Etica economica e sviluppo sociale nella crisi*, Salerno e Napoli, Orthotes, 2014. etc. これらの書の読者は、「認知資本主義」をめぐる、多彩きわまる無内容な形容詞を看取することができるはずである。事例を挙げれば、「金融資本主義」（クリスティアン・マラッツィおよびベルナルド・ポールレ）、「生権力の形態としての金融化とその統治性」（ステファノ・ルカレリ）、「生政治資本主義」（フェデリコ・キッキ）、「グローバル・プロレタリア化資本主義」（カール・ハインツ・ロート）等々。

29) Vercellone, *ibid.*, p. 76.

30) *ibid.*

31) *ibid.*, pp. 76-77.

32) MEGA II /5, S. 162. Fußnote 28).; MEGA II /6, S. 225. Fußnote 28).; MEGA II /7, S. 177. Fußnote 31).; MEGA II /10, S. 194. Fußnote 28). ただし初版では Mehrwerth が強調されている。ところで、対象的现实に対する分析・理論的探究を回避（あるいは放棄）して種々の「法則」なるものにもたれかかる典型例が、スターリン - スターリン主義である。スターリンは「ソ同盟における社会主義の経済的諸問題」（1951年）において、「商品生産の基本的経済法則が価値法則」、「資本主義的さ因の基本的法則は剰余価値法則」と、まったく機械的な対比的措定を行なった。スターリンはさらに、「現代資本主義 [資本主義の独占段階] の基本的経済法則」なるものについて、平均利潤ではなく最大限の利潤を要求することだと述べている。そしてその上で、「社会主義の基本的経済法則」なるものにまで言及し、それを「国民経済の計画性をもった、釣り合いのとれた発展の法則」だとする（*Сталин, I. V., Экономические проблемы социализма в СССР*, М., Гос. Изд.-вополит., 1953, С. 60-70; 87-97.）。これらの歴史的に順に並びたてられた「法則」なるものが、自然界にせよ社会的な物にせよ、法則と呼ばれるものと似ても似つかぬ馬鹿げたシロモノであることは明らかである。もちろん「価値法則」のみが現実には厳として存在する社会的法則である。だが、スターリンが述べるそれは、マルクスが厳密かつ理論的に導き出したものとは、根底的かつ全面的に異なる。スターリンは、それらの「基本的経済法則」以外にも、さまざまな「法則」を「発明」するのだが、まさにそうした種々多様な「法則」の定式化によって、恣意的で強権的な諸政策を、無理矢理に「根拠づける」のである。スターリンの主張を鵜呑みにしてまとめられ刊行されたのが、ソ同盟アカデミー経済学研究所『経済学』（通称『経済学教科書』、1954年刊）である。ヴェルチェッローネは、スターリン主義派の異様なまでに強迫的な「法則」主義に対して、まったく無批判であるばかりでなく、それを継承してしまっている。

33) MEGA II /4-2, S. 840.

34) イタリア語の「regno」に「世界 [mundo]」の意味がないことはない。だが、国家政治にすぐ飛びつくヴェルチェッローネらにとっては、彼らがヨーロッパ中心主義であることを顧みるならばなおのこと、「国」でしかないだろう。

35) MEGA II /4-2, S. 837-838.

36) ヴェルチェッローネは次のように述べる。「それゆえマルクスは「資本家と賃労働者の二者のみが生産の代表者である」一方で「土地所有者は、古代や中世においては実に重要な生産の機能者だったが、工業時代においては無用の長物である」と断言するのである」（Vercellone, *op. cit.*, p. 80.）。マルクスからの引

用の前半部は、イタリア語訳版にはあるが、MEWの『剰余価値学説史』には見当たらない。じつに不思議なことである。それに近い表現を探すと、現行版第三部第七篇第51章「分配諸関係と生産諸関係」中の「この生産様式〔資本主義的・生産様式〕そのものの主要な当事者たち、つまり資本家と賃労働者」(MEGA II /15, S. 851-852. 草稿では「資本家と賃労働者 *der Capitalist und der Lohnarbeiter*」と英語交じりで強調されている (MEGA II /4-2, S. 897.)) ものとなる。さて、ヴェルチェッローネが自論を権威づけるために借りてきたマルクスの叙述は、引用部の後、こう続く。「それゆえ、急進的なブルジョアは (さらにあらゆる他の租税を抑制することも意図して)。理論の上では私的土地所有の否定に向かって進み、それを固有の形態において、ブルジョアジーの、つまり資本の共有にしようと欲する。けれども実際にはそのような勇氣などはないのである」(MEW Band 26-2, S. 38-39.)。

- 37) 「認知資本主義」論者たちは、マルクスを語りながら、「レント」の定義をマルクスからではなく、イタリアの国会議員を務めた経済学者クラウディオ・ナポレオーニが1956年に上梓した『経済学辞典』に求めるのである。Cf. Napoleoni, Claudio (A cura di), *Dizionario di economia politica*, Milano, Edizioni di Comunità, 1956. 揚げ足をとるようだが、この辞典名からは『資本論』および準備労作にあった「批判」というきわめて重要な一語が消し去られている。ところで「認知資本主義」論者の若手で、ボローニャ大学で教鞭を執るフェデリコ・キッキは、ナポレオーニに依拠しつつ、こう断言する。「[...] 価値 (絶対価値) の分析は、もはや (古典派・新古典派を問わず) 経済学のパラダイムの中では、理解しきれない。なかでも、リカードゥとマルクスに端緒を持つ価値論のアポリアは、ピエロ・スラッファをはじめ、様々な試みがなされたとはいえ、経済学の文法に完全に依拠した研究のシェーマの内部であつかわれているかぎり、乗り越え不可能であることがかねてより明らかになっている」(Chicchi, Federico, “Sulla soglia del capitale, all soglie del comune: note a margine sulle ambivalenze del capitalismo biopolitico”, in Fumagalli, A. e S. Mezzadra (A cura di), *Crisi dell’economia globale. Mercati finanziari, lotte sociali e nuovi scenari politici*, Verona, Ombre Corte, 2009, p. 121.)。おやおや、である。価値の存在様態をふくめて経済学研究のパラダイムやシェーマまるごとを批判し、歴史の屑籠に叩き込もうとしたマルクスの努力は、この秀才の大道芸の前では「お手上げ」なのだ。だがキッキは「絶対価値」なるものをマルクスに探してみればよい。現行版では、第一部第四編第10章「相対的剰余価値の概念」に「商品の絶対的価値は、商品を生産する資本家にとっては、絶対的にどうでもよいことである *Der absolute Werth der Waare ist dem Kapitalisten, der sie producirt, an für sich gleichgültig.*」(MEGA II /10, S. 288.)、第二部第一篇第1章第3節「第三段階 $W' - G'$ 」に「絶対的価値量 *absolute Werthgröße*」(MEGA II /13, S. 41.)、そして同第二篇第16章第2節「可変的個別資本の回転」に「(ここでは絶対的価値形態、つまりその貨幣形態 *hier die absolute Werthform, seine Geldform*)」(ebenda, S. 288.)と述べられるにとどまる。何をもって、キッキは概念以前の「絶対価値」なるものを示してみせるのか、思案に苦しまざるを得ない。彼は注意深く『資本論』の副題を読んで熟慮してみるべきだろう。この秀才は、副題が示す「批判」の重要性が理解できなかったように思われるからである。
- 38) アントニオ・ネグリの『マルクスを超えるマルクス』がその大元となっていると思われる。ネグリのこの書は、強引な「論旨」とありもしない「引用」にうち満ちている。たとえ思考・思想の展開の飛翔がどこまでも「自由」だとしてもなお、われわれは先行研究に敬意を払うべきであり、ましてやマルクス論を展開するのならば、マルクスのテキストにまずは沿うべきである。ところが、1979年に初版が出された『マルクスを超えるマルクス』は、本書で言及した1997年版でも一切MEGA『資本論』およびその準備労作にあらず、まったく同一内容のままである。
- 39) この点については、井上「教師は労働能力を生産するか?」、『京都大学教育学部紀要』第XXVI号(1980年)、pp. 195-206、を参照のこと。
- 40) Foucault, Michel, *Naissance de la biopolitique. Cours au Collège de France. 1978-1979*, Paris, Gallimard/Seuil, 2004, pp. 79, 92.
- 41) *ibid.*, pp. 227-228.
- 42) アントニオ・ネグリとマイケル・ハートは『〈帝国〉』において、フーコーからの「引用」をもとに、まず「生権力 *Biopower*」を提示する。彼らの言い分はこうである。「フーコーが述べているように、「生は今や…権力の一対象となっている」。この権力の最高機能は、徹頭徹尾、生を投資することであり、その

最優先任務は生を管理運営することである。生権力は、かくして、権力において直接的に問題の核となっているものが、生そのものの生産と再生産であるような状況に関係しているのである」(Hartdt, Michael, and Antonio Negri, *Empire*, Cambridge, MA., Harvard University Press, 2000, p. 24.)。だが、フーコーの途中が省略された言葉は、精確には「18世紀このかた、生命が権力の対象になるようになりました。生命および身体です。かつて権力は諸主体に、つまり司法的諸主体にそなわっており、よそものの財産没収や生命そのものの処分を可能とするものでした」(Foucault, Michel, *Dits et écrits*, tome IV, Paris, Gallimard, 1994, p. 194.)。これはブラジル・バイア大学哲学部で行なわれた学会での「権力の網の目 “As malhas do poder”」と題された講演の一部であり、その内容は1979年の「18世紀における健康政策 “La politique de la santé au XVIII^e siècle”」(Foucault, Michel, *Dits et écrits*, tome III, Paris, Gallimard, 1994, pp. 725-742.)と深く結びついている。フーコーの歴史研究の姿勢が如実に表現されたものが、それらの論考であり、ネグリとハートの「生権力」とは位相を異にするものなのだ。『〈帝国〉』におけるネグリとハートの「概念」濫用は、その他にも「一般的知性と生権力」といった節に端的に表われている(Hardt and Negri, *op. cit.*, pp. 364-367.)。付け加えておくと、ネグリはマルクスとフーコーとの「連結」について、フーコーの著作の読解体験を回顧しつつ(同時にフランスの知識人界限でのネグリの主体性論への不評を慨嘆しつつ)、次の4点を挙げている。①フーコーのアプローチに基礎を置けば、絶対的剰余価値の搾取から相対的剰余価値の搾取への移行と資本の下への労働の形式的包摂から実質的包摂への移行が、産業資本主義から金融資本主義への移行下における「生きた労働」の「認知的」・特異的・多数的・協働的な諸規定につながる、②マルクスによる資本概念、とくにマニュファクチュアから大工業への移行と「社会的資本」形態から「金融資本」形態への移行は、フーコーが規定した権力概念ときわめて近い関係にある、③〈共^{コモン}〉の生産的ヘゲモニーは、フーコーに倣って階級関係を研究すれば、認知機械から得られるだけでなく、新たなテクノロジーの潜在可能性の基盤を支える人類学的変容からも得ることができる、④フーコーの理論的立場からすると、マルクス・フーコー関係は、生産的存在論と〈共^{コモン}〉概念とが会う場である。Cf. Negri, Antonio, “Un’esperanza marxista di Foucault”, posted on EuroNomade, ‘Dossier Marx’, on 30 December, 2014: <http://www.euronomade.info/?p=3903>. フーコーをここまで物神化する思考法に、われわれは減多に出会うことはない。それも、「ヒューマニズムを再生する現在性の存在論 la ontologia del presente risorge un umanesimo」の光背が差した、異様な物神である。

43) Fumagalli, Andrea, “Biocapitalism and Basic Income”, paper presented at the keynote speech of the founding symposium of the Basic Income Japan Network, Dōshisha University, March 26, 2010. この引用には次のような註がつけられている。「生資本主義への移行にともない、具体的有用労働と抽象的人間労働との関係は変成をこうむるのみならず、正の価値を抽出する労働としての生産的労働の概念もまた修正を余儀なくされる。この問題をこれ以上とりあつかう十分な余白がない。生資本主義的蓄積が、再生産や習得教育や消費の時間にまで拡張されつつあることを想起すれば、さしあたって十分である」(note 12. 強調は引用者)。まるでピエール・ド・フェルマがかの「最終定理」について書いたような物言いではないか。そして事実、「この問題」は十分に議論されることなく、シンポジウムは幕を閉じたのだ。おそらくフマガッリの「問題」は、フェルマのそれとは違い、解決されることはないだろう。

44) Fumagalli, *ibid.*

45) かつて福祉先進国として名をはせたフィンランドは、EU加盟の結果としての経済凋落によって、「財政負担の大きい」福祉制度を全廃することをめざし、2017年1月1日から試験的に2,000人の失業者を対象に月560€を支給し始めた。だが、対象者が今後どう変化するのか、すなわちベーシック・インカムを全国化するのか否か、は不明である。1980年の5.29%から2016年度の9.09%へと失業率を高めてきた「欧州の病人」(2017年初頭で同国の財務相を務めているカイ＝ヨーラン・アレクサンデル・ストゥップに対して世界最大手の金融情報企業ブルームバーグ社がおこなったインタビューでの発言) フィンランドにとって、とくにベーシック・インカム受給者にとって、この実験が全国政策となったあげく、彼や彼女の——というのは個々人のみが対象であって、カップル、グループやコミュニティは供与の対象外だからである——生のアルティメット・アウトプット(終極支出＝絶望)につながらないことを祈るばかりである。

(さきやま・まさき 本学文学部・国際文化学域・文化芸術専攻・教授)
(いのうえ・やすし 京都文教大学・非常勤講師)